



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	高麗末期から朝鮮初期における仏教の歴史的位相(論文要旨)
Author(s)	加藤,裕人
Citation	
Issue Date	2016-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/145691">http://hdl.handle.net/2309/145691</a>
Publisher	
Rights	

氏 名 : 加藤 裕人  
専攻分野の名称 : 博士 (学術)  
学位記番号 : 博甲第 270 号  
学位授与年月日 : 平成 28 年 3 月 15 日  
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士  
学位論文名 : 高麗末期から朝鮮初期における仏教の歴史的位相  
論文審査委員 : (主査) 教授 下城 一  
(副査) 教授 坂井 俊樹 教授 棚橋 信明  
教授 高木 展郎 教授 須川 永徳  
教授 桐谷 正信 (横浜国立大学大学院)

## 学位論文要旨

一般に高麗末期から朝鮮初期 (以下、麗末鮮初) は儒仏共存から儒仏対立への転換期であったと言われ、歴史的に当時の仏教は多くの弊害を生じて排斥や抑圧の対象となったと位置づけられる。近年では、かかる理解を前提に麗末鮮初における仏教政策を「抑仏政策」と捉えるのが一般的であり、その上で各個別研究が細分化する傾向にある。しかしその多くは、そもそも儒教や性理学が本来的に仏教を排撃する性質を持つことを看過しており、当時の儒者にとっての正邪をほぼそのままの形で歴史化したに過ぎない。そのため、従来の成果は麗末の仏弊を前提とする「抑仏 (排仏)」とその裏返しである「崇仏」や「護仏」といった二項対立的な把握に陥っており、儒教的な筆法を対象化しつつ総合的に歴史を捉えようとする客観的な視点に欠けるといえる。このような研究史上の課題に鑑みて、本稿では麗末鮮初における仏教の歴史的位相の諸側面を明らかにすることを目的とし、特に高麗末期における恭愍王と仏教、朝鮮初期における太宗と仏教、仏教と麗末鮮初の王朝社会についてその様相を提示した。

まず第一章では、研究史の推移を整理しつつその課題を明らかにした。19 世紀末に叙述の形から始まる朝鮮仏教史研究は、総督府の調査事業などを経て高橋亨による最初の体系的成果を得るに至る。しかしそうして提示された「排仏」の歴史は、当時の朝鮮半島における仏教の社会的な悲境に対する原因探求の成果を現状の説明として提示したものであり、そこには実際の体験に付随する価値判断の先行という問題が潜在していた。かかる戦前の研究を受けた戦後最初の論考となったのが韓阜昞の成果であり、これにより朝鮮前期の仏教史を「抑仏」と捉える見解が提示された。以降、この「抑仏」は現在に至るまで通説的見解の地位を占めているが、しかし「抑仏」の議論もまた、土地国有論とマルクス主義的発展段階論からア・プリオリに導出される、土地を媒介とする国家権力と寺院勢力との対立の構図を機械的に高麗・朝鮮に適用したものに過ぎない、という歴史学研究上の重大な問題を抱えているのである。

続く第二章では一般に高麗末期における改革政治の始点として位置づけられる恭愍王代の歴史的位相を論じた。恭愍王はまず、元の影響によって動揺著しかった高麗王位に再び安定と強度をもたらすとともに、不安定な国際情勢下において朝鮮半島の独立王朝国家という高麗の枠組みを再確立した。しかしその過程は多くの困難や代償を伴うもので、その中で恭愍王は自らの儒教的

な君主者としての徳に対する認識を下方修正していった。その結果、正室である魯国大長公主の逝去を経て儒教的な価値体系に忤り続ける道を選んだ恭愍王は、自らの在り方それ自体によって新興儒臣らの反動を醸成し、後に高麗を滅亡に至らしめる根本的な原因を作ったと考えられる。

続く第三章・第四章では朝鮮最初の排仏王として知られる太宗と仏教との関係について、それぞれ「崇仏的行為」と対仏教態度という観点で論じた。まず第三章では、太宗が各種の仏教行事を実施したのは、彼が父太祖の逝去に伴いその遺志を継承したことによるものであり、それは儒教的な「孝」を実践していく在り方の一つとして位置づけられることを明らかにした。また同時にそれは「臣庶追薦の法」制定という形で国策に反映されていたことを指摘した。第四章では、当初仏教に対する否定的認識を示していた太宗が、寺院整理や僧徒の土木營繕への使役を通して次第に僧徒に対する配慮を持つようになる一方で、父太祖の逝去を前後して仏教の存在を容認するようになり、最終的に治世十四年頃には仏教に対して「無棄無誉」という態度を取るに至っていたことを明らかにした。

最後の第五章では、朝鮮半島への「多包式」建築様式の移入と僧徒の土木營繕への賦役に焦点を当て、僧徒の建築技能者集団としての社会的役割について論じた。まず、朝鮮における「多包式」は僧恵勤によって高麗に移入された後に門弟等に受け継がれていった。その一方で、朝鮮建国期には建築技術に長けた僧徒を使役する土木營繕が頻発し、その結果朝鮮半島に「多包式」建築が普及・定着したと考えられる。他方、僧徒の土木營繕への使役は太祖～太宗期を通じてほぼ継続的に行われ、漢城を首都として機能させるための公的建造物は確実に拡充されていった。その過程で僧徒の使役が過剰化していることを憂慮するようになった太宗は土木營繕に僧徒を使役することを禁止したが、その頃には国家はすでに宮闕などの建造を終えるという成果を獲得していた。

以上のような麗末鮮初にみられる仏教の諸側面はいずれも「弊害と改革」や「崇仏か排仏か」といった二項対立的な把握では描くことのできないものであり、今後の朝鮮仏教史研究が新たな歴史像を構築していくための礎となること相違ないと考える。